

「コロナ第7波 経験生かし対策講ぜよ

新型コロナの感染が急拡大している。政府分科会の尾身茂会長はすでに「第7波に入っている」との認識を示している。

過去2年も「の時期に流行があり、半ば予想された事態だ。同じオミクロン株でもBA・5と呼ばれる感染力の強いウイルスへの置換が進んだ」と、ワクチンの3回接種の効果が落ちてきている」とが、今回の背景にあると考えられる。

流行の中心は子どもや若い世代だが、年明けの第6波では若者から高齢者に感染が広がり、多くの死者が出た。同様の事象をいかに食い止めるかが、この波を乗り切るカギとなる。

第6波の際は、発熱外来の医療機関が混雑して診察をなかなか受けられず、検査キットが不足する場面も見られた。教訓を踏まえ、感染の疑いのある人が、身近なところで、確実に検査や診療を受けられる態勢をつ

く」とが重要だ。

通常医療への影響を考慮しつつ、病床の確保に努める必要がある。この先、医療態勢が深刻な状況に陥った場合、どんな追加の支援策を取りうるかについてもあらかじめ検討しておくかねばならない。感染者が出た高齢者施設に対し、自治体が派遣する支援チームの準備にも取りかかるべきだ。今までのオミクロン株に比べ、肺でウイルスが増えやすいという実験データがあり、重症化のリスクが懸念される。重症者数の今後の推移を注視し、病状に関する情報を集めることが求められる。

岸田首相は14日の会見で、「これまでのオミクロン株は、これまでの難問は、感染者が爆発的に増えたときの社会機能の維持だ。今も濃厚接触者とされれば原則として7日間の自宅待機を、無症状でも感染すれば同じ日数の療養を求められる。子供もなら保護者の付き添いが必要になる。待機などの期間をどうまで合理的に短縮できるか、ウイルスの性質を勘案しながら早急に検討すべきだ。

社会経済活動への影響を抑えるためにも、「一人ひとりの予防策の着実な実践が欠かせない。分科会が示した換気に関する注意事項にも留意しながら、身の回りをいま一度点検したい。

首相はまた、全国に約1万3